

カントに於ける認識主観の問題

村 山 保 史

認識が対象にしたがうのではなく、対象が私たちの認識にしたがう(BXVI)という発想の転換がカントの行った転回であった。対象の認識が普遍的妥当性をもたねばならないような種類の認識の場合、このような対象を構成する主観は単に個人的なものであるとは考えられない。それは個人を超えた何ものかに他ならないであろう。カントの言う超越論的統覚・意識一般はそのような事情を良く示している。しかしだからと言って、カントは自己を新カント学派の言うような規範意識以外には考えていないのだ、と単純に割り切って考えることが彼の意に添うことであろうか。このような疑問が生じてくるのは無理のないことである。第一次世界大戦後の「存在論的解釈」(Martin, S. 105)は、この認識論において前提とされても問われること無い主客存在の意味をも問い直そうとするものであった。言いかえれば、この解釈は認識における主客関係という図式の前段階として、一方では物自体、他方では自我自体・知性Intelligenzを何らかの形で認めようとするものであった。本論は少なくともその傾向性においてこのような解釈と軌を一にするものである。しかしその意図は、自体存在や知性をそのものとして考察することではなく、認識主観の考察を本とし、その方法として、一見、無関係にも思えるこれらの概念が、カントの認識主観の考え方にいかなる影響を与えているか、を認識主観の構造の概観を通じて考察することである。

カントは自己意識を「統覚」と呼ぶ。この統覚という言葉は『純粹理性批判』において、經驗的統覚・純粹統覚(根源的統覚)・超越論的統覚の三種使用される。三種の統覚はそれぞれどのような位置付けをもつのか。

統覚 Apperzeption は \wedge 知覚に伴う \vee 、あるいは \wedge 知覚に向く \vee という意味をもっていると考えることが出来る。私たちは様々な \wedge 知覚に伴う自己意識 \vee をもつことができる。このような自己意識は、様々な知覚が自らの知覚であると意識される限り必ず伴うものである。さもなければ \wedge 私 \wedge を知覚した \vee とはなりえない。したがって、この自己意識は或る知覚が \wedge 私 \wedge の知覚 \vee であることを \wedge 可能 \vee にしたと言いうことができるであろう。しかし逆に言うところ、このような自己意識は知覚の成立に対しては必然的なものであるとは言われえない。これは或る日或る時に經驗的に与えられた知覚がまず前提され、そこに自己意識が不随意的に伴ったということに過ぎないのである。或る日の知覚に対しこのような自己意識が伴うことは、「可能的」(A 117 Ann.) であるとしか言われえない。昨日の知覚と今日の知覚に対する自己意識は、何の脈絡もなく「ばらばら」(A 120) のものなのである。カントの言明は必ずしも一貫していないが、彼はこのような知覚に伴う自己意識を「經驗的統覚」と呼んでいる。

しかしカントが問題としているのは、このような心理学的な統覚ではない。彼は「經驗的統覚は(あらゆる特殊の經驗に先行する)超越論的意識との必然的關係、すなわち、根源的統覚としての私自身についての意識との必然的關係をもつ」(A 117 Ann.) としている。問題は經驗的統覚の根底に存するような根源的統覚(純粹統覚)、もしくは超越論的統覚なのである。カントはここで純粹統覚と超越論的統覚を同一視しているが、「演繹論」一版において両統覚の明確な同一視はさらに何度か行われている。このような言葉により、解釈者たちは超越論的統覚と純粹統覚を無

造作に同一視し、区別しようという試みを行うことはない。そしてその際の根拠は、超越論的統覚は經驗的に派生しないがゆえに、言いかえれば、純粹な面があるがゆえに、同じ超越論的統覚は純粹統覚（根源的統覚）でもある、とされるのが常である。この両者の単純な同一視は正當なものであろうか。

カントは一版の「人格性の誤謬推理」において、「私たちが *Seelen* において見いだすのは、あらゆる表象に伴い、それを結合する自我という表象だけであって、それ以外のいかなる持統的表象でもない……」（A 364）（以下、傍点）は原著者の使用の有無にかかわらず引用者によるものとする。としてゐる。カントによれば、内容となる多様（与件）が受容性である感官から与えられ、この多様を自発性によって結合することにより私たちの認識は成り立つ。しかし多様に対する結合作用はさらに「意識の統一」を前提しているとカントは考へる。あらゆる表象が心の変様として内官の形式である時間に従属するように、同時にこの表象が私の表象であるためには、それに \wedge 私の \vee という意識が伴わねばならない。表象が私のものである限り、 \wedge われ思う \vee が伴わないということは不可能である。これは私たちがすでに見てきた、經驗的統覚が知覚に伴うと言ふときの \wedge 伴う \vee とは事情が異なる。この \wedge われ思う \vee は私の表象の成立に対して必然的な関係にあるわけである。このような事情を明確にするかのように、カントは「演繹論」二版を以下のような言葉で始めている。「 \wedge われ思う \vee ということは、あらゆる私の表象に伴い、えねばならない。Das Ich denke, muß alle meine Vorstellungen begleiten können; ませなら、さもなければ、全然思考されえないもので私の内で表象されることになるからであるが、これは、そうした表象が不可能であるか、それとも少なくとも私にとっては無であるかのいずれかに他ならない。」（B 131f.）

しかし私たちはこのカントの言明において一つの事実注目しなければならぬ。それは自己意識、つまり統覚についての言明が、先の一版の引用部分においては、「あらゆる表象に伴い、結合する」という言い切りの形であったのに対し、この二版での言明が、「あらゆる私の表象に伴い、えねばならない」という微妙な表現に変えられていると

いうことである。この両版における言葉の微妙な変化は何を意味しているのであろうか。

私たちはこのことを、カントが二版にいたって意識の統一には二つの面があることに気が始めたからだとは考えられないだろうか。△われ思う▽が単に「私の表象に伴いえねばならない」ということと、それが実際に私の表象を結合すること、すなわち規定することとは区別されなければならないように思えるのである。カントの次の言葉はそのことを暗示しているように思える。「……直観において与えられたこれらの諸表象はごとごとく私に属するという考えは、私がそれらの諸表象を一つの自己意識において結合するということ、あるいはそれらの諸表象を少なくとも一つの自己意識において結合しえるということに他ならないのであって、だから、たとえこの考え方はそれ自身まだ諸表象の総合の意識でないにせよ、そうした総合の可能性を前提としている。」(B 134)

カントは二版において自己を意識することと自己を認識することとを峻別する。自己を意識するとは△われ思う▽ということである。しかしこの△われ思う▽という自己意識は範疇、つまり思考の枠組を含んでいるとしても、当の考える内容自体をもたない。私はこの自己意識を、△私の表象に伴いえねばならない△われ思う▽であると考え、この△われ思う▽は、なるほど私の表象にとっては必然的なものであるとしても、△伴いえねばならない▽以上の意味をもたない、未だ認識には不十分なものであると言わざるをえない。私たちは純粹統覚と超越論的統覚とを単純に同一視する解釈に対し、この△われ思う▽が、超越論的統覚から区別して考えられるべき純粹統覚であるとは考えられないだろうか。だとすれば、この△われ思う▽は、知覚に伴うことが可能的な経験的統覚とは異なった意味である△可能的なわれ思う▽であるとも言えるだろう。私たちは純粹統覚の定義を超越論的統覚と別個に定めたわけであるから、次に、超越論的統覚が純粹統覚といかに異なるものであるか、を明らかにしなければならない。

しかしこの答えは先の引用の中に用意されていたように思われる。私たちは先の引用で、自己を意識することと自己を認識することとは異なるということを確認した。カントにとって認識とは、時間中に与えられたままの表象系列を範疇にしたがって客観的な系列に規定するということである。カントはこのような結合作用を「綜合」と呼び、それを成すのは「構想力」であるとす。このことから私は次のような定義を提出しようと思う。△△われ思う▽が、内容を含まない単に純粹な自己意識としてではなく、構想力による超越論的な綜合の意識として考えられる時、その△われ思う▽は超越論的統覚であると言われえる▽。純粹統覚と超越論的統覚とは、どちらも等しく結合作用を含むものであるとは考えられないのである。私たちはこのような意味で、超越論的統覚が△動的▽であり、純粹統覚が△静的▽であるとも言えるだろう*。超越論的統覚を純粹統覚から區別する構想力の結合作用をさらに詳しく考察してみよう。これが両統覚の違いを明確化することに他ならないからである。

* ただし、△静的▽と言っても働きを含まないということではない。構想力の内官への働きかけとしての結合作用を△動的▽とし、それに未だいたらない働きを△静的▽と考えることにする。

構想力を考察するにはその特有の問いに答えなければならぬ。それは構想力とは自発性か受容性かどちらかというものである。このような問いは統覚においては考えられなかったものだが、この問いが構想力に特有なのは、構想力が時間中の諸表象へ直接的に関係するものだからである。しかしこの問いの困難さはカントの一・二版における論述の違いにも起因している。カントは一版において、あたかも構想力が感性と悟性の橋渡しとしての中間的性格を

もつかのように書くが、二版においては、一版よりも構想力の位置を悟性よりにするからである。このような事情により、構想力を感性でも悟性でもない、その中間的な第三のものと考え、解釈が生じてくる (Heidegger, S. 130)。しかしこのような解釈は、多くの解釈者たちが指摘するように、認識は感性と悟性の共働によってなると考えるカントの出発点から逸脱しているように思われる。私はこの問題に関しては、構想力を「低次の悟性」(cf. Paton, vol. 1, p. 301)とする解釈が適当なものであると考える。たとえば、カントは構想力の内官への綜合作用を、「悟性が感性へ及ぼす一つの作用であり」(B 152)、「私たちに可能な直観の諸対象への悟性の最初の適用」(*ibid.*)であると書いておられる。この言葉において、(i)構想力が悟性の中に包摂されること。(ii)構想力よりも広い範囲をもつ悟性が、可能な直観に対する以前に何らかの働きを行使していることが暗示されている。カントが二版において形象的綜合と知性的綜合を峻別したのは、このような事情によると思われる。知性的綜合とは純粹な範疇における思考であるが、カントは知性的綜合について、それが構想力なしで単に悟性によってなされるものであって、形象的綜合とは異なる (*ibid.*) としている。綜合とは、結合する「悟性の働き Verstandeshandlung」(B 130)である。このことにより、知性的綜合と形象的綜合のどちらも悟性の働きによってなされることになるが、それにもかかわらず両者が区別されねばならないということから、カントが悟性を自発性と同一視し、特に規定可能な感性的直観にかかわる悟性を構想力と考えていることが明らかになるのである。これに対し、規定可能性にこだわらない「直観一般」の多様にかかわる悟性を言い表す言葉としては、「単なる悟性」(B 150)とか、「それ自身だけで考察された悟性」(B 153)という言葉が二版において使用されているが、このような表現は一版においては見当らない。構想力による綜合は形象的綜合に帰されるのであって、知性的綜合にはない。カントが知性的綜合を「悟性結合 Verstandesverbindung」(B 151)とも言い表しているのはこの事情を示しているように思われる。そして、これら両綜合をこれまでの私たちの解釈に当てはめると、知性的綜合は純粹統覚の働きであり、形象的綜合は構想力としての超越論的統覚の働きであるという

ことになる。このことから、カントが超越論的統覚を悟性と同一視する (Vgl. B 134 Anm.) などは、極めて正当な
ことと考えられるのである。「統覚の総合的統一の原則は、あらゆる悟性・使用の最高原理 das oberste Prinzip alles
Verstandesgebrauchsである」(B 136)。「演繹論」二版は、直観一般にかかわる知性的綜合から規定可能な感性的直
観にかかわる形象的綜合へ、言いかえれば、純粹統覚から超越論的統覚へと移りゆくのである。

意識の統一が∧静的√(形式的)なものと、実際に認識を可能にする∧動的√な綜合作用を含む段階に分けられたと
いうことは、自己意識はまさに自己の意識のみをこととする段階と、様々な表象が自らの表象であることを保証する
段階に分けられたということを意味する。この変化は、より高次の認識能力の段階から、私たち人間にとって「意味」
と「意義」をもつ認識能力の段階への推移とも言えよう。「演繹論」二版における主観的演繹と客観的演繹との明確
化、後に見るように、「一般」という言葉の類出化は決して偶然ではないのである。しかしだからと言って、私た
ちは両統覚が全く別の二つのものであると考えるわけにはゆかない。純粹統覚と超越論的統覚は、同一の認識能力の
対象規定における位置付けの相違で異なった名称をもつのである。純粹統覚が超越論的統覚として全き意味をもつ
は、悟性が構想力として全き意味をもつと同様である。有限な人間の認識能力が、純粹統覚と超越論的統覚とに認
識における論理的段階の相違として別れ、両者が同一ではないということがいかに重要な意味をもつか、は次第に明
らかになる。

二版において初めて純粹統覚と超越論的統覚が峻別されるにいたったということは、一版においては両者の区別が
曖昧であったということをも意味する。私たちの解釈を補強するためには、このことについてさらに言及しなければ
ならない。

両統覚の決定的な相違は、すでに見てきたように、一言で言えば、その∧動的√・∧静的√な意味であった。した
がって、両統覚を同一視する一版においては、この統覚の特徴が表れていない。一版における両統覚の同一視は、超

越論的統覚が純粹統覚と同意のものとして同一視されているに過ぎず、統覚には専ら純粹統覚の∧静的√な意味のみが帰されているだけで、超越論的統覚の∧動的√な意味は帰されていないのである。当然、カントは多様に対する純粹統覚（∥超越論的統覚）の自己同一性のみを強調することになる。一版における、「自己自身の汎通的同一性」（A 116）・「立ち止まる自我」（A 123）・「立ち止まる自己」（A 107）といった言葉の頻出は、この理由によると考えられる。そしてこの結果として、統覚からはみでた∧動的√な意味、つまり綜合作用の実際の行使は、統覚から切り離された構想力に帰されることになっている。一版においてあなたも構想力が統覚と感官の中間者かのように書かれていたのは、このような事情を示しているのであり*、これとは逆にすでに見てきたように、二版において超越論的統覚の∧動的√な働き自体（綜合作用）が構想力と同一視されることは、それと背中合わせの結果に他ならない。

* 構想力を感性と悟性の「共通の根」（Heidegger, S. 132）（∥第三者）と考えるハイデッガーが一版論者であるのは、この事情による。

これまで私たちは一・二版の統覚概念の変化について考察を続けてきた。そして以下の二つのことを明らかにしえたと思う。(i) 一版において、純粹統覚と超越論的統覚が互いに∧静的√なものとして同一視されていたこと。(ii) 二版において、後者が∧動的√な意味を含むようになったことにより、相変わらず∧静的√な前者から区別されるようになったことである。しかしここで一つの問いが生じてくる。それは、変化があったことはよいとしても、この変化自体はいかなる契機によって生じてきたのかという問いである。変化があったと考えるのであれば、その理由についても説明できなければならない。

この問いに答えるために、私たちは考察の視点を、超越論的統覚の意義から純粹統覚の意義へと移すことにしよう。純粹統覚が二版において認識における主役の座を超越論的統覚に奪われたことは確かである。しかし純粹統覚がそのあらゆる意義を失ってしまったわけではないのである。カントは二版にいたって、「知性的意識(表象)」という奇妙な概念を提出する。

「自我という表象における私自身についての意識は全然いかなる直観でもなく、思考する主観の自己活動の単なる知性的な表象〔意識〕に過ぎない」(B 278) (以下、「……」は引用者によるもの)。カントはここで知性的表象(意識)を直観でないとしているが、直観化されていないということは、それが規定作用における時間の制約に対し先行する(B XL Ann.)ということの意味する。したがって、この表象(意識)は厳密な意味での認識でも経験でもない(B 277)。つまり知性的意識は、(i)厳密な意味の認識の成立段階に対し論理的に先行するのである。ところで、これまで私たちは純粹統覚を、認識の成立に先行する△われ思う▽であると考えてきたのであるから、このような知性的意識が純粹統覚と繋がりをもちことは明らかである。しかしそれだけであるなら、ことさら知性的意識という名称を使用する必要はない。知性的意識はもう一つの特徴を合わせもっているのである。

「あらゆる私の判断や悟性の働きに伴う△われ在り▽という表象における私の現存在 *Dasein* の」知性的意識は先行するけれども、私の現存在がそれにおいてのみ規定されえる内的直観は、感性的で時間の制約に拘束されている(B XL Ann.)。「△われ在り▽という表象は、あらゆる思考に伴いえる意識を表現し、主観の現存 *Existenz* を直接的にそれ自身のうちに含んでいるものであるが、また主観のいかなる認識でもなく、したがってまた経験的認識、

言いかえれば、経験でもない」(B 277)。これらの引用において知性的意識の奇妙であるゆえんが明らかにになる。知性的意識は、先の(i)の性格にもかわらず、(ii)未規定 *unbestimmt* ながらも、現存在(現存)をすでにその内に含んでいるのである。しかしカントは現存在に規定作用を前提とするのであるから、未規定な現存在というのは明らかに矛盾した概念である。何がカントにこのような矛盾を犯させたのか。それが問題である。私たちはすでに知性的意識が「単なる知性的な表象」(B 278)と言われていたことを確認したが、さらに同じ意識は「あらゆるうちで最も貧弱なもの」(B 408)とも言われている。カントはこのような意識が消極的な性格をもつことを強調しているわけである。しかし逆に考えてみれば、これらの言葉には、(i)によりこの意識が厳密な意味での現存在でなく、「単なる」もの、「貧弱」なるものであっても、確かに「何か実在的なもの *etwas Reales*」(B 423 Anm.)であることが暗示されているとも言えるのである。現実には何が在るから、その何であるかが問題となるのである。知性的意識のこの特殊な意味を無視することはできない。しかし言い表すことは容易ではない。有名な「現存在の感情」(*Prolegomena*, S. 334 Anm.)・「未規定な知覚」(B 423 Anm.)・「単なる思考の際の私の自己についての意識においては、私は *das Wesen selbst* である」(B 429)などの言葉は、このようなカントのジレンマを示していると思われる。カントは他でもない未規定な現存在を認めざるをえなかったのである。

さて、ここで私たちはこのような知性的意識の二つの性格を再び純粹統覚に当てはめ、次のように言いかえてもよいだろう。カントは二版にいたって、超越論的統覚の認識における積極的な∧動的∨意味を認めた反面、純粹統覚にも(i)「単なる論理的な機能」(*ibid.*)としての、∧静的∨(形式的)な意味に付して、(ii)「単なる論理的な機能」ならざる意味、こう言ってよければ、∧知性的∨意味を認めるのである*。だから、カントが知性的意識という言葉を使用するのは、純粹統覚の特に(ii)の意味を強調する場合なのである。二版において登場する、「意識一般」(B 143)・「統覚一般」(*ibid.*)等は、逆に(ii)の意味を際立たせるための、(i)の意味の強調であるように思われ

る。こうして統覚概念が変化した根本的な理由とは、両統覚が同一のものであつてはならない理由、つまり純粹統覚の(ii)の意味を強調する必要が生じたためだということになる**。超越論的統覚とその正反対の(iii)の意味を含む純粹統覚は、互いに他から離れることによつて自らの意義を保存しようとするのである。

* もちろん、 \wedge 知性的 \vee 意味といつても、カントが知性的直観を認めているというわけではない。それはカントが再三否定するところである。この場合の \wedge 知性的 \vee 意味で私が言わんとすることは、自己意識が、自己活動的にそれ自身の内にすでに、未規定ながらも自己の現存在(—現存)を含んでいるということから、知性的直観のアナログスなものであるということである。しかしその内容が規定されるか規定されないかの差が決定的であることは言うまでもない。

** このような解答からすぐに、それならば、純粹感覺の(ii)の意味の強調自体はどのような契機によつて生じたのか、という問いが提出されるように思われる。私はこの問いについては、カントに対する「実質的觀念論」(B 276)、特に、デカルトの「蓋然的觀念論」(Zin.)の嫌疑が強調の契機になつたのではないかと考へる。カントはこの嫌疑を避けるために、外物を通じた規定作用を含む自己認識の段階から自己意識の段階を区別しなければならなかつた。区別することは相違点を際立たせることに他ならない。すでに見てきたように、一版において構想力に帰されていた \wedge 動的 \vee 意味を二版においては超越論的統覚がもつことになるが、これだけでは不十分である。超越論的統覚のみならず純粹統覚にも一版になかつた独自の特徴が必要である。となれば、カントの強調すべきは、彼の合理的傾向と相俟つて、純粹統覚(ii)の意味だと考へられないか。知性的意識(表象)という言葉は、「觀念論論駁」と二版序文の「觀念論論駁」に関する個所にのみ使用されているのである。

その結果、すでに見てきたように、一版においては混同されていた純粹統覚と超越論的統覚は、二版においてそれぞれ区別されることになる。「演繹論」一版において頻繁に登場していた、形式的・抽象的なものとしての超越論的主観と、それに対応する超越論的対象が自らの位置を失い、二版においてほとんど削除されたのは、この事情を示すように思われる。削除された両者はそれぞれ、前者は超越論的統覚から分かれた純粹統覚(i)の意味の内に、後者は純粹統覚(i)の意味に対応する、「対象一般」・「客観一般」の内に吸収されるのである。このことから逆に、「知性 Intelligenz」(B 158 Anm.)とどうも、規範意識でも現象としての經驗的統覚でもない、ハイムゼートの言う「第三の

自我」(Heimsoeth, S. 236) 的性格は、これまでの私たちの考察にしたがうと、純粹統覚の「単なる論理的な機能」ならざる(ii)の意味であると考えることができるのである。したがって、私たちの解釈では知性は規範意識と經驗的統覚のどちらにも市民権をもたない第三者ではなく、純粹統覚のうちに市民権をもつことになる。もちろん、この意味での純粹統覚はその意味を充足されることはない(厳密な意味での認識としては無である)が、それ自身無であるかと言うと、そうとも言えないのである。

ハイムゼートの解釈は、知性や *das Wesen selbst* の意義を認めたという意味で一步進んだものであるが、彼の解釈では、なぜカントが「演繹論」二版で知性を提出してきたのかという問いに答えることはできない。「演繹論」で扱われる知性はあくまで単数であって、複数ではないのである。知性の意義を度外視する解釈とともに、その意義を唯一実践の領域への橋渡しや予告のように考える切り詰めた解釈もまた、カントの意とするところとは思われない。その理解は認識主観の解釈においても不可欠なものと考えられなければならない。

カントにおいては純粹統覚が超越論的統覚に対して、人間の可能性を含むものとして前提されているのである。このことを逆に言えば、純粹統覚から転じ、実際に厳密な意味での認識(私たち人間の経験)に携わる段階としての超越論的統覚は、制限的・派生的なものということにもなる。純粹統覚が根源的統覚 *die ursprüngliche Apperzeption* とも呼ばれるゆえんである。同じ自己意識は二つの意味側面を合わせもっているのである。しかしそれにもかかわらず、有限な存在者においては両統覚は同一の認識作用の論理的段階の相違として分かれたるに過ぎず、純粹統覚の独立した意味を認めることは許されないのである。純粹統覚と超越論的統覚が、ある程度離れつつも後者でしかその意味を充足できないということが、人間の能力に一線を画さんとする批判の結論である。

文中引用文献の略号は以下の通り（年代は参照した版のもの）

A……Kant, I, *Kritik der reinen Vernunft*, 1781

B……Kant, I, *Kritik der reinen Vernunft*, 2. Auflage, 1787

Prolegomena……Kant, I, *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*, 1783, *Kant's gesammelte Schriften*, Akademie Ausgabe Bd. IV

Heimsoeth……Heimsoeth, H, *Studien zur Philosophie Immanuel Kants I*, 2. Auflage, 1971

Heidegger……Heidegger, M, *Kant und das Problem der Metaphysik*, 4. Auflage, 1973

Paton……Paton, H, J, *Kant's Metaphysic of Experience*, 1936

Martin……Martin, G., *Gesammelte Abhandlungen Band I*, 1961

参考文献（邦語文献の中から特に参考としたものを挙げる）

三宅剛一 『学の形成と自然的世界』（みすず書房）

久保元彦 『カント研究』（創文社）

中島義道 『カントの時間構成の理論』（理想社）

——大学院博士課程後期課程——